

「定義」にマークし、「定義」を使え。

「Aとは、Bである」(主語タイプの定義) **見つけたら、□で囲む!**
 「B。それがAである」(述語タイプの定義)

これらの形によって「A」の意味を定めた文が、「定義の文」である。この「A」が文章のテーマである場合、そこに設問の答えがあることが多い。

〈例〉「観察とは、事実をありのままに見つめることである」(主語タイプ)

「事実をありのままに見つめること。それが観察である」(述語タイプ)

「Aとは」は、「Aというものは」「Aというものは」「Aということは」などの場合もある。「Aは」だけの場合もあるが、Aの示すものが具体的である場合、定義ではないことが多い(たとえば、「食事は」と「みそ汁は」では、前者のほうが定義として機能し、後者は機能していないことが多い)。

① 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

以前、このような主張に出くわしたことがある。

考えるというのは、知ることとは別ものである。考えるというのとは、自分から何かを生み出すプロセスであり、他人に与えられた知識を頭に詰め込んで満足している状態とは違う。さあ、知ることばかり求めていないで、もっと考えるようにしよう——そういう主張だ。

しかし、知ること、あるいは知識というものは、本当にその程度のものなのだろうか。

たとえば、日本以外の国の名前を全く知らない人がいるとする。彼にとっては、アメリカもフランスも中国もインドも存在しないことになる。彼にとって存在するのは、「外国」だけだ。

外国の名を「知らない」彼は、外国について「考える」ことができるだろうか。外国について考えるには、ア

見つけたら、□で囲む!

言いかえる力

記述式

説明的文章

くらべる力

非記述式

文学的文章

たどる力

リカはこうだが中国はこう、というように、個別具体的な知識が不可欠だ。具体例を知っているからこそ、抽象化した「外国」なるものについて考えることができる。

名前というのは、その対象を他と区別するためである。知識も同じだ。知識の識は、識別の識である。アメリカや中国の名を知ること初めて、それらを区別・識別することができる。そして、それら区別された対象の共通点・相違点を探り、アメリカや中国という対象をより一般化し「外国」について考えるために、知識は役立つ。

知ることは、考えることと別のプロセスにあるのではない。両者はつながっている。考えるというこの前提にあるもの。それが、知識なのである。むしろ、知らないければ、考えることなどできないと言ってもよいわけだ。

〈問い〉 筆者は、知識とはどのようなものだと述べてい

ますか。七五字以内で説明しなさい。